

「立てられた人たち」

エペソ人への手紙 4 : 1 1

November.26.2023

エペソ人への手紙 4 : 1 1 (パウロ)

Preface

先週は、キリストご自身が人をお立てになった奥深い理由とその御決心について考察致しました。

そして今朝は、キリストが実際にお立てになった人たちに与えた役割・職分について考えて行きたいと思っております。

エペソ書 1 章から 4 章に至るまで見てきましたように、神さまには究極的な目的がお有りです。

それは、人の罪によって滅びることが決定づけられてしまった天地万物の一切を造り変え、天にあるもの地にあるものすべてを一つに集めなさるということです。

そして、この神のご計画と目的を伝え知らせることを、あろうことか罪人である人間を通してなさんと、恵みの内にキリストご自身がお決めになったということ、先週、「宣教のことばの愚かさを通して」という第一コリント 1 章の御言葉から確認致しました。

人間の言葉、人間の行い、人間の生き様を通してこの世に知らせ、信じ救われる者を起こす。

そうして、誰も滅びることのないように一人でも多くの者たちが、全てを一つに集めなさんという神の救いの懐に入れられるために、キリスト者には、キリストをかしらとする一つのキリストのからだであることを保ち続け、からだの一つ一つの部位として任せられている役割・職分があると言います。

特に、今日の聖書箇所エペソ 4 : 1 1 で言及されています使徒や預言者や伝道者や牧師・教師は、世の人々にキリストを宣べ伝えるという職分を神からの召命として生きる者たちであり、また、キリストのからだの部位一つ一つであるキリスト者たちに、究極的に何の目的のためにキリストのからだとされているのかを知らせ、その知らせたことをもって心の目がはっきり見えるようになり、神を深く知ることが出来るよう祈り、共にキリストの身丈にまで成長することを心づかう者たちです。

Part One

新約聖書を読んでいますと、使徒や預言者や伝道者や牧師や教師などの職分が羅列されている聖書箇所が所々出てきますが、使徒も預言者も伝道者も牧師も教師も十把一絡げと言いましょうか、どれも同じような意味合いで、つまり、

どの職分も立場も、教会の指導的立場にある人たちだというふうに一括りで捉えがちがところがあるように思いますが、実のところ、その一つ一つの職分や役割には明確な違いがあります。

2000年に渡る教会史を見てみますと、使徒や預言者や伝道者や牧師・教師の職分や役割についての違いを聖書の教えから明確に把握しなかったことによって、混乱や問題や分派や異端が起こってきたという史実があります。

特に、現代にまで続く最も大きな分派と言いましょか混乱は、カトリック教会とプロテスタント教会の分派とも言えるかもしれません。

カトリック教会には、地上の教会は一つであり、すべての教会はカトリック教会を中心にして一つにならなければならないという組織上の理念のようなものがありますが、私たちプロテスタント教会としては、残念ながら、組織上カトリック教会と一つにはなれないいくつかの大きな理由があります。

そのうちの一つに、「使徒」という役割・職分についての考えが大きく異なっているということです。

新約聖書に書かれている記述に従いますと、「使徒」という職分は恒久的持続的に続くものではなく、臨時の一過性の職分になります。

「預言者」やここエペソ書で意味しています「伝道者」も、臨時の一過性の職分になります。

それに対して、「牧師」や「教師」は、臨時の一過性の職分ではなく、主イエスが再び来臨されるその日まで続く職分・役割として立てられています。

ですので、私自身は使徒でもなければ、預言者でもなく、ここエペソ書で言う伝道者でもありません。

牧師、または教師です。

めぐみ教会が所属しています日本同盟基督教団は、教会で働く牧会者のことを牧師や伝道師と言うだけでなく、正教師や補教師と言う名称で呼ぶことがあります。

皆さんが比較的良好にお聞きになるところですと、正教師試験、補教師試験、補教師研修会、正教師按手等ではないでしょうか。

現代における所謂、教会の指導的立場にある牧師や伝道師、または、神父や司祭に至るまで、本来聖書に書かれている内容に従いますと、使徒でもなく、預言者でもなく、エペソ書が意味している伝道者でもないと言えます。

そのすべての職分は、牧師や教師に類するものとなります。

そこで今日はまず、「使徒」という職分について、聖書がどう言っているのかを探っていきたいと思います。

Part Two

新約聖書の中には、使徒と称されるために必要不可欠いくつかの条件が、記

されております。

エペソ書の著者である使徒パウロは、先週確認しましたように、「使徒の中で最も小さい者であり、使徒と呼ばれるに値しない者です」と自らのことを言っていますが、正にパウロのこの言葉の中に、最も大事な使徒としての条件が記されております。

それは、「使徒とは、自称でなれるものではない」ということです。

パウロのように、どんなに自分で自分のことを使徒に相応しくないと言ったところで、使徒であるのか使徒でないのかは、自分で決めることではありません。

また、人から任命されたり、召し出されたりするものでもありません。

「使徒」と言う職分は、ただ唯一、主なるイエス様、主なる神様が、直接お立てになった職分です。

ガラテヤ人への手紙1：1（パウロ）

パウロが使徒となったのは、人々からでもなく、人間を通しでもなく、ただ唯一、父なる神と主イエス・キリストによるものでした。

主イエス・キリストが、**直接**、パウロを使徒と致しました。

「直接」ということは、主イエス・キリストと直接、その肉体をもって、物理的にお会いしたということです。

つまり、使徒とされるためには、何よりも先ず、復活した主イエスを直接見た者でなければならず、また、その復活した主イエスを直接その目で見たということを、事実として証し出来る者でなければなりませんでした。

コリント人への手紙第一9：1（パウロ）

「私パウロは、主イエスを見なかったのですか」と、パウロが使徒であることを認めようとしない者たちに対して、パウロは、「十字架につけられ、死にて葬られ、三日目に死よりよみがえられた主イエスを直接私が見たということを、あなたがたはご存知ですよ」と問い掛けます。

さらに、第一コリント15章を見てもみますと、死より復活された主イエス様を見た人たちを列挙しながら、最後にパウロ自身に起こったことについてこう言っています。

コリント人への手紙第一15：8－9（パウロ）

「人間の倫理道徳的観点で使徒という職分に就くことを決めたり決めなかったりするならば、自分という人は使徒には相応しくないけれども、復活された主イエス様が私に現れ下さったのだから、感謝してその命に従ったのです」と、パウロは告白します。

このように、復活した主イエス様に直接お会いした者でなければ、主イエス様の復活を証しすることが出来ないために、使徒となることは出来ませんでした。

まただからと言って、主イエス様に直接会った者たちすべてが使徒となるのかと言うと、そうではありません。

自らの前に現れ下さった死より復活された主イエス様が、直接、「あなたを使徒とする」と召し出し、立てて下さらなければ使徒になることは出来ません。

使徒とされるために最も大切な条件の二つ。

一つ目は、直接復活なさった主イエス様にお会いすること。

二つ目は、その現れなさった主イエス様から、「わたしはあなたをわたしの復活を証す使徒として立てる」というお言葉を頂くということです。

Part Three

イエス様と3年間寝食を共にした12弟子たちは、当然、使徒となりました。

十字架に架けられる前のイエス様とともに生き、また、十字架の死より復活されたイエス様にお会いし、そしてイエス様から直接、「あなたがたは行って、あらゆる国の人々に私のことを証しし、父、子、聖霊の名においてバプテスマを授け、わたしの弟子としなさい」という使徒としての命を受けました。

そして最後に、使徒の働き9章にありますように、教会をずたずたに引き裂こうと迫害をしていたパウロにイエス様が現れなさり、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。あなたは、わたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子らの前に運ぶわたしの選びの器である。あなたがわたしのためにどんなに苦しまなければならないかを、あなたに示そう」と仰りながら、パウロを使徒として立てました。

「使徒」と日本語に訳されているギリシャ語 ἀπόστολος アポストロスは、「(王などの権威者から) 送り出す、遣わす」という意味の ἀποστέλλω アポステローという動詞に由来する言葉であります。

つまり、「使徒」とは、「(王などの権威者から) 遣わされる者」という意味の言葉です。

復活されたキリストの大使・証人として、キリストを語るために世に遣わされた者たちが使徒です。

そして具体的に使徒として立てられたのは、イエス様を裏切ったイスカリオテのユダの後、神の御旨によって立てられたマツティアを含むイエス様の12弟子たちと使徒パウロのみです。

ここに、イエス様の弟にあたるヤコブを含めることもありますが、いずれにしても、2000年前直接、死より復活された主イエス様に出会い、そのイエス様から直接肉声で、使徒となることを命じられた者たちが使徒です。

ゆえに、彼ら以降の人々が、使徒となることは出来ません。

聖書には、彼ら以外の人々に、イエス様が肉眼で分かるように現れなかり、肉声で使徒として召し出した者たちがいるということは一切記録されておられません。

もちろん、夢の中でとか、幻の内にイエス様が現れ下さり出会うて下さったがためにクリスチャンになったというようなことは、これまで世界で少なくない数が報告されております。

私がフラァ神学校で宣教学を学んでいた時の課題図書があったのですが、その本は、世界の宣教事情についての論文が多数掲載されている本でした。

その本の中に、今世界のイスラム教圏で起こっている宣教のわざの中で、大きな話題となっている神の宣教方法が、ある日突然、夢の中にイエス様が現れなかり、「わたしがまことの神であり、救い主である」ということを告げて下さるというものでした。

凄いですね。ちょっと羨ましいですね。

どうにもこうにもならない状況や環境の中において、イエス様が幻の内に現れなさるということはありますが、使徒たちが直接物理的に、死より復活されたイエス・キリストにお会いし、使徒としての召命を受けたというのとは、範疇・カテゴリーが違う話になります。

Part Three

三つ目の使徒としての条件は、主イエスがお教えになった真理について、その奥義について、超自然的啓示を直接受けたということです。

このことについては、すでに使徒パウロが、エペソ書3章で述べております。

エペソ人への手紙3：2-5（パウロ）

使徒パウロは、人々に、国々に知らせるべき限りなく豊かな神の恵みと奥義についての知識を、啓示によって受けました。

「啓示」という言葉を辞書で引きますと、「人間の力では知る事の出来ない宗教的真理を、神が直接、または天使など超自然的存在を介して人間へ伝達すること」とあります。

つまり、この世のものでは説明のつかない方法をもって、神様が直接、定めた人に、神の御心の奥義を知らせなさるということですね。

「啓示」と訳されているギリシャ語 'αποκάλυψις アポカリュプシスという言葉は、「ベールを剥がす」、「隠されていたものを明らかにする」という意味の言葉ですが、それまで神のみご存知であり、神の御旨にのみ秘められていたことを、直接使徒たちは神より知らされました。

先ほど見ましたガラテヤ書1章で、パウロ自身の使徒という職分について弁証するとともに、パウロ自身が宣べ伝えた福音以外の違う福音に反する福音もどきを伝えた者たち、たとえそれが天使であったとしても呪われるべきだと指摘しながら、啓示を神より直接受けた自らの使徒としての正当性を次のように

強力に述べております。

ガラテヤ人への手紙1：10－12（パウロ）

使徒パウロは、イエス・キリストによって直接、啓示を受けました。

つまり、それまで隠されていた神の奥義を、真理を直接、イエス様から受けたのです。

Part Four

四つ目の使徒の条件は、三つ目の使徒の条件に付随して与えられるものですが、それは、受けた啓示を正確に、そして神から与えられた権威をもって、ぶれることも、妥協することも、迎合することも、人を喜ばすためではなく神に喜ばれるために、示された啓示を語ることの出来る力を頂いた者たちが使徒です。

後になってやがて、聖典としての新約聖書が聖霊の導きの下決められる会議と作業の中で、その書物が神から与えられた特別な権威、使徒的権威をもって真つすぐに神の啓示が語られているのかどうか、最終的な基準となりました。

即ち、聖典にならなかった外典とされたものの中身に、「人々に取り入ろうとする」内容があることを見極めたということですね。

新約聖書27巻の内、約半分になる13巻が、パウロの書いた手紙ですが、この客観的事実をもってしても、使徒パウロは、神から受けた超自然的啓示を真つすぐに、ぶれることも、迎合することも、人に取り入ろうとするのでもなく、神の目を、神の視線を第一にしたまことの福音・奥義を語ったということが分かるでしょう。

パウロは自身が書いた手紙の中で二度ほど、「私に倣う者となってください」と言ったことがありますが、この言葉は、パウロの高慢さや独断を表す言葉でなく、むしろ、自らが語った言葉、福音が自らの思い付きや悟りや経験から出ているものではなく、神から与えられたものだという事実を常に明らかにするためのパウロの遜りの言葉でした。

パウロという方は、イエスキリストに出会い、使徒として立てられたその日から、イエス・キリストのこのみを語り、神から受けた啓示のみを伝え、その啓示の比類なき素晴らしさのためにのみ生きると、そのために死ぬと、命を懸けると、この滅びる肉のいのちは惜しくないということを常に思い、想起する方でありました。

そうでなければ、誰が、「私に倣う者となってください」なんていう言葉を一点の曇りもなく語る事が出来るでしょうか。

Part Six

最後、五つ目の条件は、使徒たちは、奇跡を行うことの出来る者たちでした。

マルコの福音書16：20（パウロ）

弟子たち（使徒たち）は出て行って、いたるところで福音を宣べ伝えた。主は彼らとともに働き、みことばを、それに伴うしるし（奇跡）をもって、確かなものとされた。

復活された主イエス様は、弟子たちが語る福音が・神の奥義が事実であることを、奇跡を行うことを伴わせることによって確証づけられました。

使徒の働きを見ますと、その中にペテロが、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものをあげよう。ナザレのイエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」と語り掛けながら、生まれつき足の不自由な人を歩けるようにしたり、お金で聖霊を欺こうとしたアナニアとサツピラは、ペテロのその罪を指摘する言葉を聞いた瞬間倒れて息が絶えてしまったり、大勢の病人や悪霊に苦しめられている者たちが、使徒たちによって癒されるという奇跡のわざが大きく起こり、人々の間に教会に対する恐れと尊敬が生じ、主イエス・キリストを信じる者たちがますます増えていきました。

そこで、また新たに問題が生じますが、嫉妬・ねたみです。

そのような使徒たちの働きと、使徒たちが人々の注目の的になっていることを恨めしく思っていた人たちの中から、「自分たちも使徒だ」と、自称使徒だという者たちが少なくない数現れました。

自称使徒たちは、あくまで自称なので、自分たちに自ら箔のようなものを付けようと、互いに推薦状を送り合いながら、教会に、自分たちが使徒であることを認めさせようとし、教会を混乱に引き込んでしまったこともありました。마울

コリント人への手紙第二11：12－15（パウロ）

偽使徒、光の御使いや義のしもべに変装しているサタンのしもべどもと、大きく一線を画する証拠として、使徒たちは、神さまから奇跡を行う権威を特別に与えられていました。

偽使徒たちは、復活されたイエス様に会ったこともなく、使徒としての召命を受けたこともなく、神の奥義を直接啓示をもって知らされたこともなく、神の真理を理解することも出来ませんでした。

だから不安なので、互いに、推薦状を送り合うんですね。

Part Five

これらの使徒としての五つの条件から、使徒という職分は一時的であり、一過性の特別な職分であったということが、聖書の記録から見て取れます。

それゆえ、使徒という職分に、継承者は存在しません。

使徒の働き12章を見ますと、12使徒の内の一人ヤコブが殉教をした時、ヤ

コブに継ぐ使徒としての継承者を誰も、教会も立てることはしませんでした。

なぜならば使徒は、神が、キリストが直接お立てになった一過性の臨時の特別な職分だからです。

ところがローマカトリック教会では、教皇を使徒ペテロの継承者だとしております。

ペテロがローマ帝国時代のローマに定着し、初代ローマ教会のリーダーとして自分の後継の使徒を立て、自分の持つ使徒としての能力を継承し、その使徒性が継承されているのが教皇であると、使徒である教皇は、神から直接啓示を受けることが出来るというのが、ローマカトリック教会の教皇制度です。

でも今、聖書で確認しましたように、使徒は人が立てる者でもなければ、復活したイエス様に直接お会いしていなければならず、「最後に私に」とパウロが言うように、使徒パウロをもって使徒という職分はその役目を終えております。

しかも歴史的に、ペテロがローマに定着し、ローマ教会の初代教皇になったなんていう妥当な歴史的証拠は何一つ残っておりません。

なので、教皇制度というものは、「使徒」という職分を聖書から明確に把握できなかった、もしくはしなかったことに起因していることだと思われま

この自称使徒の問題は、何もカトリック教会だけの問題でなく、プロテスタント教会の中にも起こって参りました。

教会史の中の一つだけ例を挙げますと、スコットランドのトーマス・チャルマーズという元牧師が興したカトリック使徒教会というのがあります。

彼は、プロテスタントの雄弁な説教者でありましたが、いつの日からか突然、「自分は使徒として立てられている者であり、神からの啓示を直接受けて、それを語っている」と主張し始めてしまいました。

聖書の御言葉・聖書の教えよりも、自分のこと、自分の考え、自分の主張、自分を大きくしてしまったことから招いた悲劇だと、言えるかもしれません。

Conclusion

使徒たちが働いていた2000年前の初代教会の時代は、まだ新約聖書が完成していなかったために、その新約聖書の完成に向けて、神さまは使徒たちを特別に立て、用いて、直接啓示を与え、また奇跡まで伴わせながらその信憑性を確かなものとして下さいました。

そして、その語られた御言葉、書き残された神の奥義、真理、みこころ、恵み、祝福が、今私たちの手の内に聖書として残されております。

使徒たちが命を懸け、生涯を掛けて成したその働きの全てが、この聖書の中にあります。

ということは、ある意味、いや確実に、使徒たちの時代よりもはるかに私たち

は祝福された条件の中、信仰生活を送り、生きることが出来るということです。

開けばそこに、神の御業があり、神の言葉があり、神の御心があり、奥義が、恵みが、答えがあるのです。

使徒の時代のような壮大な奇跡や癒しは、現代においてそう簡単に神さま起こして下さらないかもしれませんが、逆に言いますと、起こす必要がないということにもなります。

なぜならば、この聖書の御言葉の中に、神の全ての御心と啓示と奥義がもうすでに記されており、私たちの手の内にあるからです。

どうか、私たちが使徒の時代よりもはるかに良い時代を生きているんだということを自覚し、喜び、感謝する者でありたいと願います。

時間の都合上、今日は、「使徒」という職分についてのみ考えて来ましたが、次回、年明けになってしまうでしょうか、預言者と伝道者と牧師・教師について聖書から学んで行きたいと思えます。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ書 4：11